２０１１／１２／０４　　礼拝メッセージ　　近藤修司　牧師

主　　題：感謝の人生・実践編：敵に対して
聖書箇所：ローマ人への手紙　１２章１７－２１節

前回、私たちは「あなたを迫害する者を祝福しなさい」という命令を学びました。あなたを迫害するその人の上に祝福があるように祈りなさいと、主は私たちに教えています。結局、私たちはどのようなときでも主の前に喜ばれることを選択するようにと、そのことを主は教えておられるのです。相手がだれであれ、何をされたとしても、あなたは常に主の前に正しいことを考えてそれを選択するように、それが大切だと主は私たちに教えておられるのです。

今日、私たちが学ぼうとしているこの１７節からのみことばは、もちろん、すべての人に対することですが、特に、主イエス・キリストを信じていない人たちに対して私たちはどのように対応するのか、どのように生きて行くのか、そのことを教えています。イエスを信じていない人たちは「神の敵」です。その人たちに私たちはどのように接していくのか、パウロは私たちに四つのことを教えています。まず、そのことを見て行きましょう。

Ｃ．愛の実践

敵に対する正しい対応　　１７－２１節

１．善を行う　　１７節

１７節に**「だれに対してでも、悪に悪を報いることをせず、」**とあります。最初にパウロが私たちに教えることは、だれに対してもあなたは常に善を行ないなさいということです。

１）悪を行なわない　　１７節

「悪に悪を報いることをせず、」、「悪には悪で」とそのようにも訳せます。人々があなたに悪口を言ったとして、だから、言い返してもいいということにはならないのです。人があなたに陰口を言ったり、非難、中傷するから、私も同じことをしても良いと、聖書はそのようには教えていません。人々があなたに為す暴力であっても、何かを盗んだとして、だから、私も同じことをしてもいいということにはならないと主は教えています。ある人々は聖書のことばを使ってこのように言います。「でも、聖書の中には仕返しすることも教えられているのではないですか？『目には目を、歯には歯を』と書かれていますよ。」と。確かに、この教えは旧約聖書の中に３回出て来ます。出エジプト２１：２４**「目には目。歯には歯。手には手。足には足。」**、レビ記２４：２０**「骨折には骨折。目には目。歯には歯。人に傷を負わせたように人は自分もそうされなければならない。」**、申命記１９：２１**「骨折には骨折。目には目。歯には歯。人に傷を負わせたように人は自分もそうされなければならない。」**。今、私たちがごいっしょに見たいのは、それに関する主イエス・キリストの教えです。

マタイの福音書５：３８には**「『目には目で、歯には歯で。』と言われたのを、あなたがたは聞いています。」**と記されています。この後を読んでゆくと、イエスがなぜこのことを話されたのか、その理由が分かります。それは、その当時の人々がこの教えを全く正しく解釈していなかったからです。彼らの間違いを正すために、主はここでこの教えを与えようとしておられるのです。確かに、先ほども話したように、旧約聖書の中には**「目には目。歯には歯。」**と書かれています。では、これは何を意味しているのでしょう？主はなぜそのことをお教えになったのでしょう？そのことを見る必要があります。

◎「目には目。歯には歯。」という教えが与えられた理由

（１）犯罪の拡大を防ぐため

というのは、個人的な争いが部族全部を巻き込んだり、国を巻き込んだりする可能性があります。だから、そのようなことにならないために、被害者と加害者の問題であって、それ以上にならないようにということです。

（２）個人的報復の増大を防ぐため

たとえば、些細な口論が殺人へとエスカレートしてしまう、そのようなケースは私たちは今も見ます。つまり、ここで主が教えたことは、自分が受けた傷以上を人に与えてはいけないということです。だから、「目には目」「歯には歯」だと言われたのです。報復の増大、仕返しの増大を防ぐためです。

（３）個人的復讐を止めさせるため

法廷において判事が刑罰と罰金を定めるための基準だったのです。ところが、主イエス・キリストの時代には、判事に与えられたこの教えを人々は個人的に適用していたのです。パリサイ人たちは、特に、個人的報復を正当化していたのです。だから、主はここでその人たちの間違いを明らかにしようとした

のです。旧約聖書は「やられたらやり返して良い、倍にして返したらいい」とは教えていません。私たちの社会では、特に、１２月になるとテレビでそのような番組が放映されます。「仇討ちだ」と、それが非常に美徳であるかのように、ヒーローのように語られたりもします。一般社会ではそうかも知れませんが、神はそれは間違っていると教えます。それは主のみこころでないと明確に言われています。個人的に、やられたらやり返すというのは神のみこころに反することです。

２）善を行う　：　「すべての人が良いと思うことを図りなさい」　　１７節

同時に、パウロは悪を行なってはならないということを教えただけでなく、却って、善を行いなさいということを教えています。**「すべての人が良いと思うことを図りなさい」**と、まさに、私たち人間が取りたいと思う行為と全く相反することを主は命じておられます。**「良いと思うこと」**と記されていることばは、Ⅱコリント８：２１には「公明正大」と訳されています。**「それは、主の御前ばかりでなく、人の前でも公明正大なことを示そうと考えているからです。」**。「公平である、正しいこと」です。良心に恥じることがない、正しいことを為すということです。

ですから、パウロが言わんとしたことは明確です。だれが見ても非難されるところがなく、是認するに価することを図る、すなわち、そのように考慮して、よく考えて選択しなさいということです。すべての人の前で良いことを考えて、どんなときでもだれの前でもそれを行ないなさいと、それがこの１７節で主がお教えになったことです。確かに、主はそのことを教えておられます。先ほど見たマタイの福音書５：３８のその後を見ると、このような教えが為されています。３９節**「しかし、わたしはあなたがたに言います。悪い者に手向かってはいけません。あなたの右の頬を打つような者には、左の頬も向けなさい。」**このことばも多くの人たちが知っています。しかし、ここでイエスが言われたことは、叩かれたら叩き返したらいい、ただ我慢すればいいということではありません。これは恥をかかされたときのことを言っているのです。侮辱されたときのことです。殆どの人は右利きです。右手で相手の右の頬を打とうとするとどうなりますか？だれかの頬を打とうとすると、右利きの人は相手の左の頬を打つことになります。しかし、ここでは「右の頬を打つ」と言っています。つまり、平手ではなく手の甲で打つことになります。実は、その当時、ユダヤのラビの律法によれば、手の甲で打たれることは手の平で叩かれるよりも二倍の屈辱を受ける行為とされていたのです。非常に屈辱的な行為なのです。人の前で手の甲でもって顔を叩かれる、そのような屈辱的な行為を受けるときであったとしても「では、仕返しを…」ではなく、あなたは反対の頬を向けなさいと言うのです。つまり、今私たちが見ているように、悪に対して悪で応じるのではなく善で応じなさいということです。

その後の４０節にも**「あなたを告訴して下着を取ろうとする者には、上着もやりなさい。」**とあります。簡単そうに見えるのですが、これは非常に難しいことです。というのは、上着は特に貧しい人たちにとって、自分を寒さから守る唯一のものだからです。毛でできたこのコートは非常に寒いパレスチナの寒さ、凍えから自分を守ってくれるものです。主エジプト記２２章にも出て来ますが、お金を借りるために上着を質に入れたとしても、陽が沈むまでにそれを彼に返してあげなさいというのです。２２：２６**「もし、隣人の着る物を質に取るようなことをするのなら、日没までにそれを返さなければならない。」**と。彼にはそれしかないから、凍えてしまうからそれを彼に返してあげなさい、大切なものだから、なくてはならないものだからです。イエスがここで言われたことは**「下着を取ろうとする者には、上着もやりなさい。」**と、つまり、「悪に対して悪で応じてはならない。善を行ないなさい。良いことを行ないなさい。公明正大なことを行ないなさい。」と、主はそのように教えておられるのです。

パウロはこのように言いました。Ⅰテサロニケ５：１５**「だれも悪をもって悪に報いないように気をつけ、お互いの間で、またすべての人に対して、いつも善を行なうよう務めなさい。」**、パウロはローマ１２：１７で語ったことを別の表現を使ってこのように言うのです。また、それと同じことをペテロもこのように言っています。Ⅰペテロ３：９**「悪をもって悪に報いず、侮辱をもって侮辱に報いず、かえって祝福を与えなさい。あなたがたは祝福を受け継ぐために召されたのだからです。」**。ですから、明らかなことは、これは主ご自身がお教えになったことであり、ゆえに、パウロも教えペテロも教えたということです。つまり、これこそが神のみこころなのです。多くの信仰者の皆さんが、私たちのほとんどと言ってもいいかもしれませんが、こうして主のみこころが明らかにされたときに思うことは、それを実践することは大変難しいということです。悪に対して悪で応じることは簡単なことです。しかし、それを善で応じること、人々の悪に対して善で応じることは大変難しいことです。

しかし、皆さん、私たちが何度も学んでいるように、このようにして主の命令を目にするとき、当然のように私たちの内側から「神さま、私にそんなこと言われても無理です。私はまだ信仰的にも弱いし、また、実際に分からないこともあるし…、信仰的に幼い私には無理です。」という口実が出て来ますが、どのような口実を付けようともそれには全く関係なく、神は皆さんの弱さを知った上でこの命令を与え

たのです。なぜですか？私たちにとってそれが実現可能だからです。なぜ、人間的に難しいことを神は敢えてあなたを通して為そうとされるのでしょう？そこには目的があるからです。それはあなたを通して、私たちの神がどんなに偉大な方であるかを明らかに示すためです。あなたを通して主が約束してくださり、主が与えてくださったこの救いがどんなにすばらしいものかということを、あなたを用いて神は明らかにしてくれるのです。だから、私たちが「このように生きなさい」と言われたときに「私には無理です」と言って神のみわざを拒むこと、また、神が働きを為そうとしているのにその働きを阻止するようなことは止めなければいけないのです。神があなたを通して為そうとしておられるなら、私たちは「どうぞ、そのように私を通してあなたのみわざを為してください。」と祈り、そのように期待することです。

まだ主イエスを知らない人たちがあなたに大変なことを言ってくるかもしれないし、あなたが苦しむことをされるかもしれない、悲しいことをされるかもしれない。でも、どんなことがあったとしてもそれに対して「悪で応じてはならない。善を行ないなさい。」と言われるのです。それが「わたしのみこころである」と主は言われるのです。

２．平和を保つ　　１８節

１８節**「あなたがたは、自分に関する限り、すべての人と平和を保ちなさい。」**、言わんとするメッセージは明らかです。平和を保つ、平和を持ち続けるということです。実は、新改訳聖書には訳されていないのですが、１８節の文頭は「もし可能なら」という先行句で始まるのです。「もし可能なら、**あなたがたは、自分に関する限り、すべての人と平和を保ちなさい。**」となります。なぜ、このように言うのでしょう？すべての人との平和は、どんなに私たちが願っても叶わないときがあるからです。私たちがどんなに平和を求めても相手がそれを拒むときがあります。私たちがどんなに願っても、そこに平和を築くことはできません。そのようなことがあることをパウロは知っているのです。でも、パウロが教えたいことは、私たち信仰者はどんな人たちに対しても平和を作る者でなければならないということです。

平和を作り出すこと、平和を保つこと、保ち続けること、それが我々信仰者の責任であると言うのです。もちろん、気をつけなければいけないのは、平和を得るために私たちが信じているこの真理に逆らうことをしても良いと、この箇所が教えているのではないということです。人々と上手くやっていくために、私たちの信じている真理を妥協してもいいと教えているのではありません。家族の間に平和を保つために、彼らが勧める偶像崇拝をしても良いと言っているのではありません。罪を犯しても良いとここで教えているのではないのです。しかし、私たちはこの世にあって、問題を作り出すようなトラブルメーカーであってはならないのです。仲違いをしなくても良いのに、仲違いをすることがあってはならないのです。もし、問題があるなら解決を図ることです。平和を愛し、平和を作る人でないといけないと教えているのです。

なぜ、そのようなことが私たちに可能なのでしょう？私たちは神との平和を得たのです。ですから、その平和を得た者として、我々は人々との間に平和を築くことができるのです。それがたとえ、神の敵であったとしても、私たちは平和を築くことができるのです。どのようにしてできますか？少なくとも、私たちは彼らのために祈り続けることができます。彼らに常に親切に為し続けることが出来ます。もし私たちの内に誤りがあるならば、それを誠実に謝罪して彼らと付き合っていくことができます。「平和を作りなさい、平和を保ち続けなさい」と。私たちがその平和を乱す者であってはならないというのです。だから皆さん、私たちは祈ることが必要なのです。そして、私たちはどんなときにも、人々の悪に対しても良いことを為し、彼らに常に親切であり続けようとするのです。

３．神にゆだねる　　１９節

三つ目にパウロが勧めることは１９節に記されています。**「愛する人たち。自分で復讐してはいけません。神の怒りに任せなさい。」**と同じことが繰り返されています。私たちは悪に悪をもって報いてはならない、人の悪に対して悪で応じてはならない、自分で復讐してはいけない、神の怒りに任せなさいと言うのです。**「神の怒りに任せなさい。」**とは非常に面白い表現を使っています。神に神の怒りをもたらす機会を与えて差し上げなさいということです。神がご自分の怒りを下すその機会を差し上げなさいと。だから、それはあなたがすることではないのです。神が為さることだからそのことを神に任せておきなさいということです。確かに、私たちがみことばを見るなら、人の罪に対しては神のさばきがあることが分かります。私たちが知っていることは、イエス・キリストを信じていようといまいと、罪が赦されていようといまいと、すべての人間は神の前に立つということです。例外はありません。皆さんも知っておられるように、そして、そのように信じておられるように…。

私たちは神の前に立って、罪赦されている者は主から褒美をいただきます。しかし、罪が赦されていない者は、神の前に立ってそのすべての罪が明らかにされ、それに相応しいさばきを受けます。だから、

このように言われるのです。「さばきはわたしに任せておきなさい。わたしがするから。あなたがたがすることは、すべてをわたしに任せてわたしがあなたに求めている良いこと、善を行ない続けてゆくことです。」と。Ｉペテロ２：２３でペテロはこのように言います。**「ののしられても、ののしり返さず、苦しめられても、おどすことをせず、正しくさばかれる方にお任せになりました。」**と。だれのことか分かりますね？ペテロのことではありません。私たちの主のことです。主イエス・キリストのことです。私たちの最高の模範である主のことです。人々からののしられても彼はののしり返すことをしなかった。苦しめられても彼らをおどすようなことをしなかったのです。主は悪に悪を報いることをされませんでした。人々の悪に対して悪で応じることをなさいませんでした。すべて、さばき主である神にお任せになったのです。私たちにもそのように実践しなさいと言うのです。

４．悪に負けない　　２０－２１節

四つ目に、パウロは２０，２１節で「悪に負けないように」と教えます。「いつも善を行ないなさい」、「平和を保ちなさい」、「神にすべてをゆだねなさい」、そして、「悪に負けないように」と言います。

１）善を行なう　：　必要を満たしてあげなさい

１９節の後半から見ましょう。**「それは、こう書いてあるからです。「復讐はわたしのすることである。わたしが報いをする、と主は言われる。:20 もしあなたの敵が飢えたなら、彼に食べさせなさい。渇いたなら、飲ませなさい。」**と、最初に、パウロが教えることは「善を行ないなさい」です。つまり、その人たちの必要を満たしてあげなさいと言うのです。食べ物にこと欠いるのなら食べさせてあげなさい。飲み物が必要だったら飲ませてあげなさいと。みことばが言ったように、復讐は主ご自身がなさることだから、報いは主が与えることだから、私たちは人々に対して善を行なってゆきなさいと言うのです。特に、ここで神の敵が皆さんに大変なことをするような人であっても、彼らが飢えているなら「いい気味だ！」と言って見てみぬふりをするのではなく、彼らを避けるのではなく、まず、あなたが出ていって彼らに最初に必要な食べ物を与えなさい、渇いているならまずあなたが行って彼らに飲み物を与えなさい、彼らを愛してそのようにしなさいと言うのです。

なぜ、そこまでしなければいけないのですか？私はこれだけ恥をかかされ、あなたの御名が汚され、これ程あの人たちは悪いことを為している、それなのになぜでそこまでしなければいけないのですか？と、私たちが抱くこのような疑問に対して、みことばは答えを与えてくれています。

２）その結果

２０節の後半に**「そうすることによって、」**とあります。そうすることによってどうなるのか？**「あなたは彼の頭に燃える炭火を積むことになるのです。」**と言います。このような結果をもたらすと言うのです。**「積むことになる」**とは「彼の上に積み上げていく」ということです。旧約聖書において、この「燃える」とか「炭火」というのは、普通は「神のさばき」を意味しています。しかし、ここでは神のさばきのことを言っているのではありません。なぜなら、ご覧いただくとお分かりのように、ここでは人々に対して「善を行ないなさい」と言っているからです。さばきとは関係のないことです。「人の悪に対して良いことを為しなさい。公明正大なことをやっていきなさい。」と言われているからです。

では、この**「燃える炭火」**とはいったい何でしょう？多くの解釈がありますが、ここでは「恥じさせる、深い後悔、悔恨、良心の咎め、自責の念」と、そのような意味をもっています。ということは、イエス・キリストを信じる人々に対して悪を行った彼らが、自らの行為を恥じ入ることになるということです。彼らの為す悪に対して私たちが悪で応じるなら、このような結果は生まれません。でも、私たちが善を行なうなら、彼らは自らの行為を恥じ入るというのです。

また、エジプト人の文献によれば、この**「燃える炭火を積む」**とは「愛の行為の結果として起こる心の変化の力強い象徴である」と、そのようにも記されています。ですから、どちらを取るにしてもこのように言えます。私たちが知っていることは、私たちは人の心を変えることができないということです。皆さんが一生懸命努力するなら人の心は変わるでしょうか？変わりません。変えてくださるのは神のみわざです。しかし、私たちにも責任があるのです。どういうことか？私たちは人々に愛を示していくということです。なぜなら、私たちはこのような命令を主からいただいているからです。**「『心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くし、知性を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』また『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』…」**（ルカ１０：２７）、このみことばの実践です。皆さん、これが主の命令である以上、最初にも話したように、それは私たちにとって実現不可能なことでしょうか？どうですか？神は私たちに不可能なことを命じておられるのでしょうか？いいえ！できることを言われているのです。あなたも私もこのように、主が命じておられるように人の悪に対して善でもって応じることができるのです。そのような人へと神は私たちを変えていってくれるのです。

先ほども話したように、人の心を変えるのは神のわざです。しかし、人の愛によって、確かに、人々

の心が変わったという事実があります。悪に対して愛で応じたことによって、その人の心が変えられたということは聖書の中にも記されています。その中の一つは、イスラエルの王ダビデです。ご存じのように、ダビデはサウル王からいのちを狙われていました。ダビデが何か悪いことしたからではありません。ダビデを妬んでのことでした。エン・ゲディにダビデがいると聞いたときに、サウルは精鋭を集めてエン・ゲディに出向いて行きます。目的はダビデを殺すためです。エン・ゲディに到着したときに、サウル王は用を足すために洞穴に入っていきます。ご存じのようにこの洞穴の中にはダビデとその部下がいたのです。ダビデの部下は彼にささやくのです。**「今こそ、主があなたに、『見よ。わたしはあなたの敵をあなたの手に渡す。彼をあなたのよいと思うようにせよ。』と言われた、その時です。」**（Ｉサムエル２４：４）と。「今、サウルを殺すことができます。神がこのようにすばらしい機会をくださったのです。」と言うのです。そのとき、ダビデが何をしたか？用を足しているサウルの所に行き、その上着のすそを切りました。サウルが洞穴を出たときに、ダビデはその後に続いて、そして、サウル王に声をかけます。サウルが後ろを振り向くと、ダビデは地にひれ伏して礼をしたとあります。そして、ダビデはサウルに訴えるのです。２４：１１**「わが父よ。どうか、私の手にあるあなたの上着のすそをよくご覧ください。私はあなたの上着のすそを切り取りましたが、あなたを殺しはしませんでした。それによって私に悪いこともそむきの罪もないことを、確かに認めてください。私はあなたに罪を犯さなかったのに、あなたは私のいのちを取ろうとつけねらっておられます。」**と。１３節に**「昔のことわざに、『悪は悪者から出る。』と言っているので、私はあなたを手にかけることはしません。」**とあります。つまり、ダビデが告白したことは「たとえ、人が何と言っても私は悪を行ないません」でした。サウル王の為した悪に対して彼は悪で応じようとはしなかったのです。

そして、２４：１２に記されているみことばは非常に興味深いことばです。ダビデは**「どうか、主が、私とあなたの間をさばき、主が私の仇を、あなたに報いられますように。私はあなたを手にかけることはしません。」**と言いました。「私はあなたをさばきません。さばきは主に任せます。」と言っているのです。ダビデはここで自分の決意を明らかにするのです。「私はどんなことがあっても悪は行ないません」、「あなたの為した悪に対するさばきは主に任せます。私は悪を行ないません。」と。今、私たちが見ているみことばの教えと同じことを言っていませんか？ダビデはサウル王の悪に対して悪で応じることはなかったのです。その結果どうなったか？興味深いことがこの後に記されています。２４：１６－１９**「ダビデがこのようにサウルに語り終えたとき、サウルは、「これはあなたの声なのか。わが子ダビデよ。」と言った。サウルは声をあげて泣いた。:17 そしてダビデに言った。「あなたは私より正しい。あなたは私に良くしてくれたのに、私はあなたに悪いしうちをした。:18 あなたが私に良いことをしていたことを、きょう、あなたは知らせてくれた。主が私をあなたの手に渡されたのに、私を殺さなかったからだ。:19 人が自分の敵を見つけたとき、無事にその敵を去らせるであろうか。あなたがきょう、私にしてくれた事の報いとして、主があなたに幸いを与えられるように。」**と。もちろん、残念なことに、この後、２６章にはもう一度サウルがダビデを殺すために精鋭を送ることが記されています。そのときもダビデは、このサウル王に悪を行わなかったのです。却って、ダビデはサウル王の槍と水差しとを持ち帰り、王、そして将軍を殺すことが出来たのに私はそれをしなかったと言います。サウルは同じように、神の前に自分の罪を詫びて、そして、ダビデに祝福があるようにと祈っています。そのことはＩサムエル記２６章に記されています。

つまり、ダビデはサウル王の悪に対して善で対応したのです。自分のいのちが狙われていながら、そして、その敵を（そのように言えると思います）殺すことができたのに、ダビデは神の前に正しいことを選択したのです。そして、神はダビデを祝したのです。もちろん、サウルの心にも働かれました。人の心を変えるのは神のわざです。しかし、あなたや私に神が望んでおられることは、相手がだれであれ、どんなことをされたとしても、あなたはその悪に対して悪で応じてはならないということです。どんな理由をつけようと、あなたが悪で報いようとするなら、それは主のみこころに反しているのです。主が喜ばれること、それはクリスチャンだけでなくそうでない人たちにも「善と思うことを行ないなさい」です。それが「あなたの責任」だというのです。

３）勧め　　２１節

最後に、このような勧めがあります。２１節**「悪に負けてはいけません。かえって、善をもって悪に打ち勝ちなさい。」**と。三つ目は「勧め」です。「善を行ないなさい」と言ったパウロ、その結果を記したパウロ、そして、最後に勧めを為しています。「悪に負けてはいけない」と言います。彼が言わんとしていることは、

（１）悪に悪で応じた場合　―　悪が勝利する
（２）悪に善で応じた場合　―　善が勝利する

どちらが神のみこころだと思いますか？どちらが神がお喜びになることだと思いますか？主イエス･キ

リストがどのように歩まれたのかを思い出してください。人の悪に対して善で応じられました。そして、父なる神の栄光が現われたのです。だから、あなたも私も、どんなときでも、だれに対してでも善を行ない続けていきなさいと言うのです。

今日、私たちはすべてを見ることはできませんが、なぜ、このことが大切なのでしょう？それは、私たちに主から大切な務めが与えられているからです。それはこのすばらしい主の救い、福音を宣べ伝えるという務めです。そのために救われているのです。皆さん、ご存じですね？私たちが主の恵みによって救われたのは、私たちがこの主を知らない人たちに主の救いのすばらしさを伝えてゆくためだということを。どのようにしてそれを明らかにしていくのですか？私たちがこの救いのすばらしさを生きて行くことです。救い主によって生まれ変わったことを、人々の前で明らかにすることです。人を愛することのできない私たちが、神によって愛され、神の愛をいただき、その神の愛をもってすべての人を愛することができるように生まれ変わったことを明らかにすることです。人を赦せない私たちが、主によって赦され、そして、その赦しをもって人々を赦すことができる者に変えられたことを明らかにしていくのです。

神を愛し、隣人を愛する者となったことを明らかにしていくのです。ですから、パウロは言うのです。ですから、ペテロは言うのです。ですから、主が言われるのです。「どんなときでも、人の悪に対して悪で応じてはならない！善を行ないなさい!良いことを行ないなさい!」と。そのときに、主のみわざが為されるとともに、主が喜んでくださるのです。だから、善を行ない続けていきなさいと言います。そんな人にあなたは今日、変えられます。そのような歩みを始めて行くことができます。主があなたを助けてくださいます。主の命令はあなたにとって不可能なことではありません。あなたにとって重荷とはならないのです。主の助けによって、そんな人に主はあなたを変えていってくれます。

信仰者の皆さん、このようなみわざを主があなたのうちに為そうとしていらっしゃるのです。神の愛でもって人に接することができる、そんな人に。どうぞ、このみことばを実践する者として、そして、そのために主の助けをいただきながら出て行ってください。そして、主があなたを通して為されるみわざにごいっしょに期待しましょう。これが主のみこころだとみことばが私たちに教えてくださっているからです。

《考えましょう》

１．どうして主は、悪に対して悪で報いることを喜ばれないのでしょう？

２．どうして主は、悪に対して善を行うことを喜ばれるのでしょう？